

補説②

即位し、又多くの人々で彼をそしめる者が出てきた。それは彼は言行の文のみ飾り、その実、徳が伴わないというのである。そういうわけで彼は出仕できず家に埋もれ、時に合わず志が得られなかった。しかし、元來大志を抱いていた人であるから、平常世の中にあさましくなったのを嘆き「私は少年時より名のある賢者につかえ、高い地位を得てきたが徒らに金印を持ち紫綬を下げる丞相、又天子の節を持って外国に使いする大官などになって名声を海外に掲げるようなことは、かりにも得ようとは思わない。常に徳を納めて雲をも凌ぐべき高遠な志を養い、三公の貴き位、千金の富などは、これを思うだけでも潔きよしとしない。いかに貧しくとも悲しまず、いかに賤しくともうらまず、あくまで名ある賢者の風にならおうとこい願ひ、道徳を人知れずに修得して、以つて身も名も全くしてこの世を終え、後世の人々の手本となろうと思ふ」といつていた。(原文・口語訳ともに新釈漢文大系本に従う)。

○108句 仲宣について

【王仲宣】

王粲。字は仲宣。山東省高平の人。後漢の碩学祭豔の知遇を受ける。一七歳の頃、長安の乱を避けて、劉表の下に身を寄せる、風采上らず重要視されなかった。この頃作られたのが「登樓賦」で綿々と望郷の念を訴えている。後漢の曹操に認められ、要職を歴任し、侍中となる。魏の制度の改廃制定に参与し業績を上げる。文人としては建安の七子の筆頭に挙げられる。〔魏志〕卷二十一 王粲伝・『蒙求』(仲宣独歩)